妊娠期における夫婦の状況

――親となる意識の男女比較――

小泉智恵* 中山美由紀** 福丸由佳*** 無藤 隆****

本研究は親となる意識についてプロスペクティブに調査し、その形成について明らかにしていくことを目的とする。その第1段階として、妊娠期にある初産婦とその夫を対象に親となる意識の男女比較をおこなう。方法は、平成14、15年度出産予定で首都圏保健センター、病院の主催する母親学級、両親学級参加している夫婦2442組を対象に妊娠中に質問紙調査を実施した。そのうち、調査協力への同意と回答が得られた初産婦856人とその夫695人を分析対象とした。測度は親意識、理想の親像、理想の親子関係であった。その結果、親意識では、男性は親となることの肯定面のみを意識し、女性は親となることの肯定的側面と否定的側面の両面を意識していた。こうした意識は理想の親像、理想の親子関係にも表れており、男性は伝統的な父親イメージを持ち、女性は母親として子どもを温かく見守るようなイメージを持ち、情緒的つながりと親密なコミュニケーションを望む一方で、子育ての実質的な負担を懸念し、むしろ自分自身を大切にしたいと考えていた。考察では、親としての発達プロセスの中での位置づけという視点から、妊娠期の親となる意識が出産後の親役割の従事を通して親となる意識がどのように形成されるかについて議論された。

問題と目的

現代社会は子育ては愛情であると意味付与しにくいという。「なぜ子どもをよりよく育てなくてはならないのか」という問いに親が悩まされ、そのために「よりよい子育て」に狂奔する親、子育てに意味を見出せないで悩む親、やけになって子育て責任を放棄する親が表れている(山田、1999)。その1つの表れとして、児童虐待の増加があげられる。全国の児童相談所に寄せられる児童虐待に関する相談処理の件数は、逐年増加傾向にあり、平成13年度は2万3,274件となっている。虐待の内容では、身体的虐待が約5割と一番多く、次いでネグレクトが約4割、心理的虐待、性的虐待の順となっている。被虐待者の年齢は0歳～就学年齢以前の乳幼児層が全体の半数を占めていることから、虐待が早期から始まっていることを示している（内閣府、2003)。このような社会問題に取り組むためには、自身が親となり子どもを育てることについて子どもを産む前から考え、動機を高め、心理的、物理的、人的といったさまざまな準備をすることが必要であろう。そこで本研究では妊娠期の女性とその配偶者である男性を対象として、それぞれが親となることについてどのように捉えているのかを明らかにすることを目的とする。

親となることは、一般に女性、つまり母親の問題として捉えられてきた。実際に主たる養育者が母親であることが多く、世の中においても社会規範として母性神話が根強いことだけでなく、心理学においても母親が子どもに代替不可能な決定的重要性をもつという理論や実証研究が古くからあることもまた、親となることが母親の問題であって父親の問題でないという印象を後押ししている。しかし、柏木・若松（1994)、小野寺・青木・小山（1998）は父親にとっても親となることに重要な意義があることを指摘している。

心理学においては、親となることに関する先行研究は近年多くなっている。例えば、Galinsky（1987）は子どもの発達に伴って親も発達していくと捉え、そのプロセスを6つの段階に分類した。それによると妊娠中は第1段階：イメージ形成期とよばれ、親になることでどのようなことが生じてくるのかをイメージし、出産の準備をする時期である。その後、第2段階：養育期（出産後2年間）では親性への移行を経験し、子

キーワード：親となる意識、理想の親像、理想の親子関係、妊娠期、夫婦
* 国立精神・神経センター精神保健研究所　** 北里大学　*** 聖徳大学
**** お茶の水女子大学子ども発達研究センター

育ての喜び、悩み、不安などが連続して発生する。第3段階：権威期（子どもが2歳頃から4歳頃まで）では子どもに対して親がどのような権威を持っているかを示し、子どもの世界の広がりに伴って子どもとの距離も獲得していく。第4段階：説明期（子どもが5歳頃から12歳頃まで）は子どもに対して現実世界を説明し、子どもの自己概念を発達させる。第5段階：相互依存期（子どもが13歳頃から思春期）は子どもの急激な変化に対応し子どもとの権威関係を再構築しながら、子どもとの別離の準備をする。第6段階：巣立ち期（高校・大学卒業頃）は子どもが就職・結婚などを期に親の家から去る頃で、これまでの子育ての再評価をし、子どもの巣立ちに適応していく。このように親が養育行動を通して子どもの発達を促す一方向だけではなく、子どもの発達に伴って親の感情も変化、成長し、親となる意識が発達する双方向であることが指摘されている。親を対象とした研究、特に子どもや育児に関わる感情を扱った国内の研究を見ると、それらの多くは第2段階から第3段階（子どもが0歳から5歳頃）までが中心である（小坂、2004）。

ここで親となることに関する研究を概観しよう。柏木・若松（1994）は、3～5歳の幼児をもつ父親、母親を対象とした質問紙調査で子どもが生まれる前と後でどのような変化を感じたかをたずねた。このようなレトロスペクテティブな研究デザインで親となることの意識の特徴を調べた結果、親となることの意識は柔軟さ、自己抑制、運命・信仰・伝統の受容、視野の広がり、生き甲斐・存在感、自己の強さといった6因子によって構成されていたこと、いずれも男性より女性に変化が著しいことが明らかにされた。また、これと同時に育児への感情の男女差を検討し、男性は女性に比べて育児への制約感が少なく、子どもは分身感が高いといったこと、育児への肯定感は男女間に有意な差はなかったが両者とも高得点であったこと、他方で育児・家事を多くおこなっている男性を配偶者に持つ場合は女性の育児への制約感が低下し、育児への肯定感が上昇したことが報告された。これらのことから、男性は肯定的な感情のみを持ち、女性は肯定面と否定面を併せ持っていること、但し男性が家事・育児を多くおこなっているならば女性の肯定面はより大きくなり否定面はより小さくなることを指摘している。

柏木（1995）によると、大多数の女性は妊娠当初から受容的肯定的態度を示すが、このような人たちはその後の妊娠中、出産後の苦痛などに対しても肯定的に受け止める傾向がみとめられた。しかし、否定的に受け止めた人たちは苦痛を感じ、子どもをかわいいとあまり思えない傾向が強かった。このことから、妊娠したときの感情が肯定的、否定的いずれにおいても、その後の妊娠・出産後も連続していくことが示唆された。こうした結果から、妊娠初期の感情はその後の親となる意識の変化・発達を左右することが予想される。

小野寺（1995）は、妊娠7－8ヶ月の初産の夫婦に調査を行い、その結果として、夫婦ともに子どもが産まれるのを楽しみにしていて、親となる責任感をどちらも同程度感じているが男性のほうが親となる自信が高いこと、一家を支えていくという意識が強いことを示した。これから父親になる男性は妻同様、子どものことを楽しみにしていると同時に、責任感などを感じていることがわかった。また、男性の中で「父親になる実感が非常にある」と答えた者が27.5%おり、妻と同様に実感をかなり感じている男性もいることも示された。親となる実感を感じているかどうかは、妊娠期の妻に対する協力や思いやり、さらに子どもが産まれてからの育児協力にも大きく影響を与えると考えられる。実際に親になる実感の強さと親意識の関連性を調査した結果、実感のある男性は心の準備がかなりできていることが認められ、また積極的に親となる準備行動をとっていることがわかった（小野寺、1996）。

これらの研究結果から、親となる意識は妻の妊娠中からの夫婦それぞれの肯定的感情や親になるための心理的な準備、出産後の夫の家事・育児への参加と妻に対するサポートが重要であることが予測される。この点についてプロスペクティブな研究デザインで縦断調査をし、親となるための意識の形成メカニズムを明らかにする必要がある。

福丸・小泉・中山・無藤（2004）は、第1子を妊娠・出産する母親にとって夫からの物理的・情緒的サポートは、初めての妊娠を経験している妻にとって非常に重要であるだけでなく、妊娠期というそれまで夫婦という2者関係にあった男女が子どもを含む3者関係に移行する変化の時期という家族の発達という視点からも非常に重要な意味をもつことを指摘している。こうした視点から、妻の妊娠中における夫の変化について男性側（夫）、女性側（妻）それぞれの認知に差があるかを検討した。その結果、妻の身体を気遣ったり、他の子どもに対する興味がわいたりする点では男女差はみとめられなかったが、夫自身は帰宅時間を早くし、妻の話を良く聞くようになったことを意識していた一方、妻側では夫が家事を手伝うようになったがより一生懸命に働くようになったと感じていたことを示し

た。すなわち、夫自身は妻の妊娠によって仕事を早く切り上げ、かつ家では妻の話にも耳を傾ける、などの情緒的サポートも行っているという夫自身の自己評価に対して、妻のほうは夫ほどにはそういった変化を感じていないことがうかがえる。妻は、家事などの物理的なサポートにおいて夫に変化がみられると感じていると同時に、夫はより一生懸命働くようになったと感じている。このように妊娠期における夫の変化に対しても、すでに夫と妻の意識には差があることが示唆された。こうした結果は、プロスペクティブな研究デザインにおいて親となる意識がその時期その時期で変化し、同じ感情が連続的に形成されるわけではないことを示唆している。この点においてもプロスペクティブな研究を行う価値は非常に高い。

ところで、親となる意識の形成には、理想の親像については、次の関連する研究がある。花沢（2000）は、個人の中にどの程度の母性あるいは父性が存在するのかを測定するため、大学生を対象に調査をしたところ、母性項目と父性項目は次のように選出された。母性をあらわす言葉として、あたたかい・思いやりのある・こまやかな・親しみやすい・世話好きな・包み込む・よく気のつく・やさしい・やわらかいが得られた。父性をあらわす言葉として、威厳のある・重々しい・決断力のある・厳格な・たのもしい・頼りがいのある・たくましい・力強い・理性的な、が得られた。こうした母性項目、父性項目ともに男女の回答傾向にあまり相違が見られないことがわかった。また、母性得点、父性得点ともに女性よりも男性の平均値の方が有意に高く、男性の父性度得点よりも母性度得点の方が高かった。このことから、個人内に両方の特性を持ち合わせている可能性が高いと考えられる。

そこで本研究では親となる意識についてプロスペクティブに調査し、その形成について明らかにしていくことを目的とする。その第一段階として妊娠期にある初産婦とその夫を対象に男女比較をおこない、親となる意識の特徴を明らかにする。将来的には親、配偶者、仕事の多重役割と心理的健康との関連を検討する。

方法

1．調査対象：本研究は平成14、15年度出産予定者の夫婦を対象に妊娠中から産後数年に渡る長期縦断研究において家族のライフスタイルと健康について検討する目的で計画された。今回の報告は妊娠中である第一回目調査のデータである。

総配布数2,442組のうち、回収数は、夫712人、妻873人であった。今回は第１回目調査の第１子妊娠夫婦のみを分析の対象とし、かつ不適切な回答を除いたため、有効回答数は夫695人（28.5%）、妻856人（35.1%）であった。

対象者の妊娠月数は中期から後期がもっとも多く、5ヶ月未満1.5%、5ヶ月以上8ヶ月未満65.4%、8ヶ月以上32.9%、不明0.2%であった。平均年齢は夫が31.9歳(17～55)、妻は29.9歳（17～45）であった。夫の就業状況は常勤が87.5%、非常勤5.5%、無職0.7%、その他4%、不明2.3%、妻の就業状況は常勤18.0%、非常勤15.7%、無職60.4%、その他1%、不明4.9%だった。本研究の対象者の母親の第１子出産年齢は全国平均とほとんど同じであった。また、第１回21世紀出生児縦断調査によると、第１子出産１年前に就業している母親は全国で24.6%と報告されているが、本研究の対象者の母親は常勤、非常勤の合計33.7%と高かった。一般に南関東では母親の就業率が高い傾向にあることから、21世紀縦断調査の南関東在住の母親の就業形態のものとほぼ同様であると推測される（中山・福丸・小泉・無藤、2004）。

2．調査手続き：東京都内8ヶ所の保健所、埼玉県内１ヶ所の保健所、神奈川県内１ヶ所の病院の協力を得て、各機関で行われている母親学級・両親学級の開催時に、研究者が出向き、調査の目的と概要を説明し、質問を受けた上で参加者全員に調査用紙を配布した。調査用紙は夫用、妻用を１セットとし、調査の概要および研究者の連絡先を記した挨拶状、返送用封筒とあわせて封筒にいれ、１世帯に１部ずつとした。協力可能な場合には、自宅で調査用紙に記入してもらい、回収は夫と妻それぞれ別の封筒に入れて郵送してもらった。

3．調査内容：親となる意識として、親意識、理想の親像、理想の親子関係の３側面を取り上げて検討した。

(1) 親意識：親意識は柏木・若松（1994）を参考にして作成した。「子どもを持つことで自分の経験が豊かになるだろう」「子育てによって忍耐強くなるだろう」「子どもと過ごす時間は幸せだろう」「子どもに対していらいらすることが多くなるだろう」「子育てで我が家の経済的な負担が重くなるだろう」「環境的に子育てしにくいだろう」などといった17項目についてそれぞれ５件法（１：あてはまらない～５：よくあてはまる）でたずねた。

(2) 理想の親像：理想の親像として「明るい」「行動

的な」「やさしい」「厳格な」「しっかりした」などといった14の形容詞を用いて項目とした。これらについてそれぞれ4件法（1：全くあてはまらない～4：非常によくあてはまる）でたずねた。

(3) 理想の親子関係：近年の親子関係で多く見られる3つの関係を想定して理想の親子関係項目を作成した。一つ目は伝統的な上下のある関係、二つ目は『友達親子』『一卵性母娘』といった上下のない水平関係、そして三つ目は親、子それぞれの個を尊重し、むしろ距離をおいた関係である。項目としては、上下のある関係として「親の威厳を大事にしたい」「子どものことは何でもコントロールしたい」、水平関係として「子どもとは友達のように何でも話したい」「子どもと一緒に楽しみたい」、距離をおいた関係として「親子の間でもお互いの考えを尊重しあいたい」「子育て以外の親自身の世界を大事にしたい」などといった15項目を作成した。これらについてそれぞれ4件法（1：全くあてはまらない～4：非常によくあてはまる）でたずねた。

(4) 属性：年齢、妊娠月数、就労の有無、職業形態、家族構成についてたずねた。

4．分析の手順：分析はそれぞれの項目についてt検定を用いて男女差を検討した。

結果

(1) 親意識では、「子どもを持つことで自分がより柔軟になるだろう」(t=2.48, p<.05)「子どもと一緒にいるのが楽しくなるだろう」(t=2.27, p<.05)では女性に比べて男性の方が有意に得点が高かった。他方、「自分の経験が豊かになるだろう」(t=-4.94, p<.001)「子育てによって忍耐強くなるだろう」(t=-2.07, p<.05)「子育てによって人を思いやる気持ちが強くなるだろう」(t=-2.54, p<.05)「子どもに対していらいらすることが多くなるだろう」(t=-11.05, p<.001)「子どもを持つと精神的に休まらないだろう」(t=-8.20, p<.001)「子育てのために自分の時間が持てないだろう」(t=-11.39, p<.001)「子どものために自分の行動が制限されるだろう」(t=-11.55, p<.001)「子育てで我が家の経済的な負担が重くなるだろう」(t=-4.70, p<.001)「環境的に子育てしにくいだろう」(t=-3.11, p<.01)においては男性より女性の方が有意に高かった（図1）。

(2) 理想の親像では、「明るい」(t=-5.50, p<.001)「おおらかな」(t=-2.15, p<.05)「温かい」(t=-2.92, p<.01)で女性の方が有意に高く、「厳格な」(t=5.27, p<.001)で男性の方が有意に高かった（図2）。

(3) 理想の親子関係では、「子どもと一緒に喜びを分かち合いたい」(t=-4.03, p<.001)「子どもの気持ちを大切にしたい」(t=-2.89, p<.01)「子どもとは友達のように何でも話したい」(t=-4.05, p<.001)

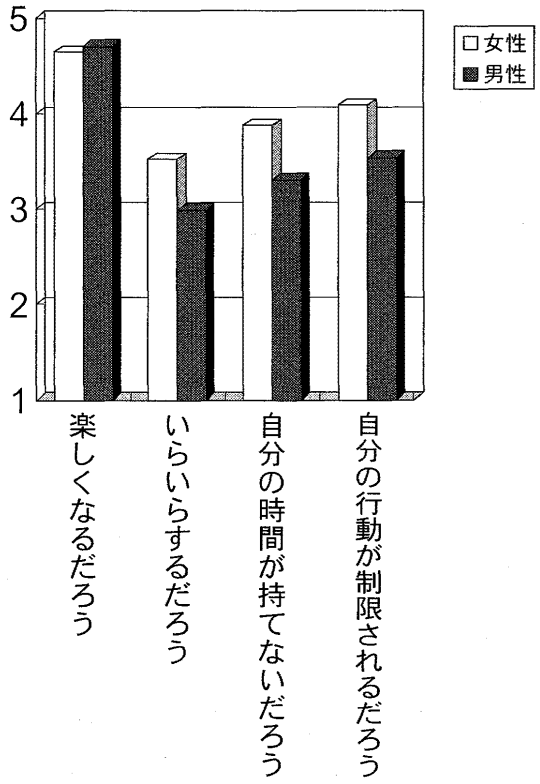

図1　親意識の男女差

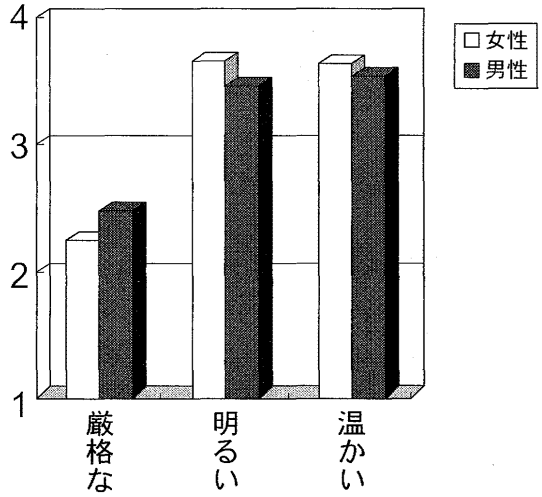

図2　理想の親像の男女差

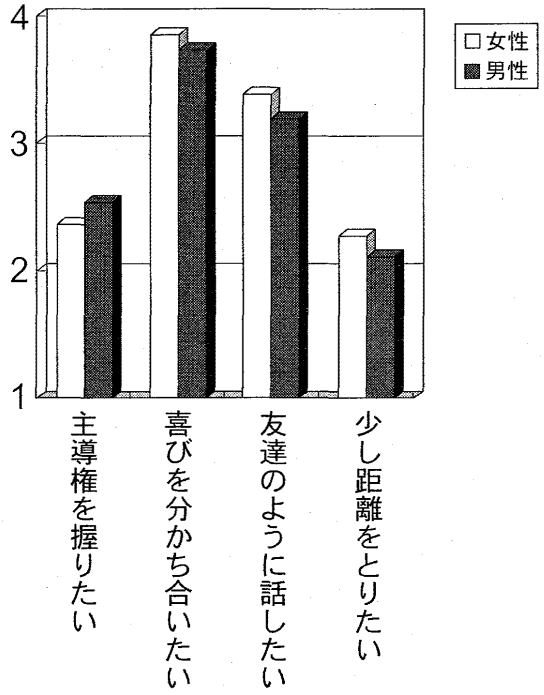

図３　理想の親子関係の男女差

「子どものことは何でも把握したい」(t=-3.23, p<.001)「親子の間でもお互いの考えを尊重しあいたい」(t=-4.56, p<.001)「子育て以外の親自身の世界を大事にしたい」(t=-2.99, p<.01)「子どもとは少し距離をとりたい」(t=-3.34, p<.001)において男性より女性の方が得点が高かった。これに対して、「子どものことは親が主導権を握りたい」(t=3.48, p<.001)「子どものことは何でもコントロールしたい」(t=2.61, p<.01)においては女性より男性の方が高かった（図３）。

考察

本研究は妊娠中の夫婦における親となる意識の男女差を検討する目的で妊娠中の夫婦を対象とした質問紙調査を実施した。その結果、親意識、理想の親像、理想の親子関係でそれぞれ有意な差がみとめられた。

親意識では、男性の方が「自分がより柔軟になるだろう」「子どもと一緒にいるのが楽しくなるだろう」といった肯定的項目で有意に高得点だった。他方、女性の方が「自分の経験が豊になるだろう」「子育てによって忍耐強くなるだろう」子育てによって人を思いやる気持ちが強くなるだろう」といった肯定的項目と、「子どもに対していらいらすることが多くなるだろう」「子どもを持つと精神的に休まらないだろう」「子育てのために自分の時間が持てないだろう」「子どものために自分の行動が制限されるだろう」「子育てで我が家の経済的な負担が重くなるだろう」「環境的に子育てしにくいだろう」といった否定的項目の両方で有意に高得点であった。こうした結果から、男性は子育ての肯定的な側面のみを強く意識していたが、女性は子育ての肯定的な側面を強く意識していると同時に否定的な側面も強く意識していたことがわかった。これらの結果は柏木・若松（1994）とほぼ同様であった。

こうした結果の背景には子育てが女性中心であることを示唆している。女性は子育てを主に担うことが多く、大幅な時間と労力を子育てに費やしているが、男性は１日の大半の時間を仕事に費やしていて子育てをする時間が短い。例えば、第１回21世紀出生児縦断調査（厚生労働省、2002）によると、男性がいつもしている割合が最も高いものは、「家の中で相手をする」38.3%、「お風呂に入れる」34.4%であるのに対し、他の育児項目、「食事の世話をする」「おむつを取り替える」「寝かしつける」「戸外へ散歩に行く」といった手間のかかる育児にいつも参加している割合は６%前後であった。親としての意識・成長が子育ての苦楽の中で育まれること（服部・原田、1991）を考えると、男性の育児参加の低さはのちの親意識の形成に影響を及ぼすことが予想される。

理想の親像では、女性の方が「明るい」「おおらかな」「温かい」といった優しい親像を持っているのに対して男性の方は「厳格な」親像を持っていた。こうした結果は花沢（2000）において大学生が示した母性像、父性像イメージに合致していた。すなわち、母性は優しくやわらかいイメージ、父性は硬くしっかりしたイメージであった。実際に親となった人と大学生とがほぼ同じイメージを持っていることがわかった。

理想の親子関係では、女性は子どもと情緒的つながりとコミュニケーションを多く持ちたいと考える一方で自分自身の考えや世界を大切にしたいと考えていた。男性は子どもを指導・統制する関係性を重視していた。女性は水平関係を求めつつ、距離をおいた関係でもありたいと考えている。近年特徴的な『友達親子』という情緒的に密接なつながりを持ちたいと思う反面、子育ての負担の重さから距離をおいた関係にしておきたいというアンビバレントな心理を表していると考えられる。一方、男性は上下のある関係を求めているが、これは男性の責任感の強さ、一家を支えていくという意識の強さ（小野寺、1995）を反映していると考えられる。今後、子どもが生まれ夫婦で育児をしていく中で理想の親子関係は変化していくことが予想さ

れる。子どもの気質、性格、親子のコミュニケーションによる影響が強いだろうと考えられるが、夫婦で育児共同感を持てるかどうか（中山・三枝、2003）によっても女性の子育ての負担が減り、男性の気負いが減ることで理想の親子関係も影響されると考えられる。

上述した結果を総合的に考察すると、先行研究と同様に男性は親となることの肯定的側面のみを意識し、女性は親となることの肯定的側面と否定的側面の両面を意識していた。こうした意識は理想の親像、理想の親子関係にも表れており、男性は伝統的な父親イメージを持ち、子どもとの関係で権威や指導を重視していた。他方、女性は母親として子どもを温かく見守るようなイメージを持ち、情緒的つながりと親密なコミュニケーションを望む一方で、子育ての実質的な負担を懸念し、むしろ自分自身を大切にしたいと考えていた。今後の研究としては、親としての発達プロセスの各段階において親となる意識がどのように変化・形成されていくのかをプロスペクティブな縦断研究手法によって明らかにしていくことが必要であろう。多くの先行研究が第2段階、第3段階までにとどまっていることを考えると、第6段階、つまり子どもが巣立つ頃までの長期縦断研究が望まれる。また、親自身の多重役割、各役割での経験、子ども自身の気質、性格なども親となる意識に影響すると考えられる。これらの要因も含めて検討するべきであろう。

文献

福丸由佳・小泉智恵・中山美由紀・無藤隆．(2004)．妊娠期における夫婦の状況(2) ― 夫の変化に対する男女比較 ―　*日本発達心理学会第15回大会発表論文集*，141．

花沢成一．(2000)．父性度・母性度評定尺度作成の試み　*日本大学文理学部人文科学研究所研究紀要第59号*，255-267．

柏木惠子．(1993)．父親の発達心理学：父性の現在とその周辺　川島書店．

柏木惠子・若松素子．(1994)．「親となること」による人格発達：生涯発達的視点から親を研究する試み　*発達心理学研究*，5，73-83．

柏木惠子．(1995)．子どもと教育親の発達心理学：今、よい親とはなにか．岩波書店．

小泉智恵・中山美由紀・福丸由佳・無藤隆．(2004)．妊娠期における夫婦の状況(3) ― 親となる意識の男女比較 ―．*日本発達心理学会第15回大会発表論文集*，142．

小坂千秋．(2004)．親としての発達　糸井尚子・渡辺千歳（編）．*発達心理学エチュード*，229-244．

厚生労働省．(2002)．第1回21世紀出生児縦断調査平成13年度．

内閣府編．(2003)．青少年白書平成15年版．

中山美由紀・三枝愛．(2003)．1歳6ヶ月児をもつ母親に対する父親の育児支援行動　母性衛生，44，512-520．

中山美由紀・福丸由佳・小泉智恵・無藤隆．(2004)．妊娠期における夫婦の状況(1) ― 調査の概要 ―　*日本発達心理学会第15回大会発表論文集*，140．

小野寺敦子．(1995)．父性意識の成立過程に関する研究：父親となる心の準備性に焦点をあてて　*家庭教育研究所紀要*，17，95-105．

小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓．(1998)．父親になる意識の形成過程　*発達心理学研究*，9，121-130．

謝辞

今回の調査にご理解、ご協力を賜りました保健所、病院の関係者の皆様、そして調査にご協力くださいました未来のお父様・お母様に、心から感謝申し上げます。

付記

本研究の実施にあたりお茶の水女子大学COEプログラム、平成14年度成育医療研究委託費14公-4の助成を受けた。